子供たちの生活習慣は、家庭の中で身につけさせるもの

近年、社会問題としてクローズアップされていることの一つに、「学級崩壊」という問題がある。学校で子どもたちが静かにできないために授業が成り立たないという状況だ。これに対して子供たちの親から、「学校や先生は手をこまねいているだけで、責任をもって教育してくれない」という声があがっている。

しかし、私はその声には共感できない。なぜなら子供の教育というのは学校教育だけがすべてではないからだ。まず、基本にあるのが**家庭教育**であり、それから**学校教育**があり、**社会教育**がある。そして、これらの教育環境がそれぞれの役割をきちんと果たすことで、初めて子供の教育が成り立つからだ。

その中で、学校というところは学問を学ぶところであり、発達段階に応じて必要なことをきちんと学ばせることが求められている。その意味でいうと、日本の学校教育は、世界のどの国にも負けないほど高レベルなカリキュラムが組まれている。しかし、基本となる家庭教育はどうかというと、とても“高レベル”とはいえないように私には思える。学校教育よりもむしろ、家庭教育が崩れつつあるのではないかとさえ感じることが多い。

たとえば、最近の子供たちを見ていると、「挨拶をする」「遅刻をしない」「休むときは連絡を入れる」などといった、基本的なことができない子供がたくさんいる。また、夜中まで出歩いたり、テレビやパソコンなどに夜通し興じるといったように、生活時間が乱れている子供も少なくない。しかも、夜中になっても子供が家に帰ってこないのに、心配すらしない親も多いと聞く。

現代は、街中が夜中まで煌々と明かりをつけていて、昼夜の区別がつかなくなりつつある。以前に比べれば娯楽もふえ、子供の興味を引くものが氾濫している。そういう社会だからこそ、子供にはどういう生活をさせていけばいいのか、しっかり教育する必要がある。子供の生活習慣というものは、家庭の中で身につけさせるものだ。それは、一日二十四時間という時間を、どのように過ごしていくのかということの積み重ねによるものである。

それぞれの家庭には事情があり、なかなか子供の側にいてやれないということもあるだろう。だが、最後にはやはり親が責任をもち、子供と向かい合い、導いていかなければいけないと私は思う。